

niponica

Discovering
Japan

にかほに

no. 35



• 特集 •

踊れ、
ニッポン!



niponica
にっぽにか^{no.} 35

・特集・
踊れ、ニッポン!

ち い き ふ う ど は ぐ く ふ り ゆ う お ど り で ん と う う つ の う
地域の風土とともに育まれた風流踊、伝統を受け継ぐ能、
げ き じ ょ う
劇場でのパフォーマンスからアニメのダンスまで、
に ほ ん こ せ い ゆ た お ど い ろ ど
日本は個性豊かな踊りで彩られている。
に ほ ん ぶ ん か か ら だ か ん に ほ ん お ど
日本の文化を身体ごと感じるために、さあ、日本で踊ろう。

毎年8月に開催される徳島の伝統芸能「阿波おどり」。
約10万人の踊り手が参加する（写真＝アフロ）
表紙／ダンサーの森山開次（11頁参照）
photo: Isamu Uehara (Sun-Ad)

contents

- 04 日本人はなぜ踊るのか
- 06 日本の無形文化遺産 風流踊
- 10 伝統を継承する人、革新する人
- 12 踊りを観に劇場へ行こう
- 14 アニメも踊る！
- 16 にっぽん地図めぐり
仮面の踊り
- 18 召し上がれ、日本
そうめん
- 20 街歩きにっぽん
郡上八幡
- 24 ニッポンみやげ
かんざし

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にっぽにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

no.35 R-051228

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>

日本人はなぜ踊るのか

劇場や町や広場で。学校や家庭やSNSで。
日本人がよく踊るのはなぜなのか。
その理由は、長い歴史に隠されている。



11世紀頃、宮廷で舞楽「青海波」が演じられるようすを描いた絵画。
土佐派「源氏物語画帖」紅葉賀（部分） 堺市博物館

日本の踊りの起源を明らかにするのは難しいが、神への奉納を目的とした宗教的舞踊「神楽」が始まりのひとつとされる。7世紀頃になると外国からいろいろな楽器と舞踊が伝わって日本古来の神楽と結びつき、笙や笛、太鼓の演奏にあわせて舞う「舞楽」が生まれ、宮廷や貴族から保護された。広げた腕をゆっくりと旋回させる舞楽の動きに、その後、日本の舞踊全般にみられるようになった軽やかで優美な所作の原形を探ることができる。

舞楽の流れを汲んで14世紀に誕生した「能」は、シテ（主役）を中心とする演者が、セリフや情景を歌う声楽と楽器演奏にあわせて厳かに舞い演じる歌舞劇。時の

神楽 Kagura

宮崎県高千穂町で古くから続く「高千穂の夜神楽」。
神を招いて一晩中踊りを奉納する



かぶき踊り

Kabuki Odori



庶民の間で熱狂的に受け入れられたかぶき踊りの創始者、出雲の阿国
「阿国歌舞伎圖屏風」(部分) 京都国立博物館

支配者の庇護を受けるなどして発展を遂げたいくつかの流派は600年を経て今なお現存し、面やきらびやかな装束、専用の舞台とともに、唯一無二の様式美を受け継いでいる（10頁参照）。15世紀頃、民衆の間では、祭りや仮装行列から生じたとされる「風流踊」が爆発的に流行。華々しい衣装で着飾り、鉦や太鼓にあわせて大勢で踊る群舞のスタイルが、全国津々浦々でそれぞれに個性的な郷土芸能となり根を張った（6～9頁参照）。

風流踊はその後、庶民が思い思いに参加して踊る「盆踊り」と、プロの役者による舞台劇「歌舞伎」へと二分化していく。歌舞伎は、17世紀頃に男装の女芸者・

日本舞踊

Nihon Buyo

恋する娘のさまざまな表情を、華やかな衣裳の変化や小道具を用いてみせる『京鹿子娘道成寺』。日本舞踊の代表的な演目を三代目藤間紫が舞う
(写真提供＝紫派藤間流藤間事務所)



盆踊り

Bon Odori

老若男女がやぐらをまわりながら踊る盆踊りは、夏の風物詩
(写真＝アフロ)



コンテンポラリーダンス

Contemporary Dance

日本のコンテンポラリーダンスを紹介するダンス・アーカイヴ in Japan 2023より『夏畑』（振付＝折田克子 出演＝平山素子、島田保武 写真＝鹿摩隆司 提供＝新国立劇場）



出雲の阿国が京都で始めた「かぶき踊り」が起りで、流行歌を織り交ぜながら演じて人気を博した。やがて独特の振りや型、瞬時に衣装を変える演出、扇や手ぬぐいなどの小道具を使う表現法が編み出され、歌舞伎の中心地は江戸（現在の東京）に移った。いっぽう京都や大阪では歌舞伎舞踊から「上方舞」が派生し座敷芸として発達。現在は家元別に100以上の流派がある「日本舞踊」へと受け継がれ、劇場や宴席で披露されている。

21世紀の今、ユネスコの無形文化遺産に登録されている能や歌舞伎だけではなく、バレエやコンテンポラリーダンスなどのジャンルで国際的に活躍する日本人パフォーマー

が数多く存在するが、一般市民の日常にも、踊りはすみずみにまで浸透している。中学校体育の必修科目であることに象徴されるように、ダンスは学校生活のあらゆるシーンに現れる。大人もスポーツ観戦やアイドルの応援に踊りでエールを送る。SNS上では、アニメのキャラクターの身ぶりをまねて踊った動画がさらなるアレンジ動画の再投稿を呼び、若者たちがたくさんの仲間といっしょに踊るきっかけをつくっている。

このように、長い時をかけ、日本人は共感の輪をつなぐ手段として踊りの文化を育ててきたのだ。



日本の 無形文化遺産 風流踊

2022年にユネスコの無形文化遺産に登録された「風流踊」。「風流」とは、もともと上品で優雅なものを意味する言葉だったが、やがて華やかに装って大勢で踊る群舞を指すようになった。日本各地に今も脈々と伝わる、味わい深い踊りの数々を紹介しよう。

西馬音内の盆踊 ◆秋田県羽後町

8月、先祖の霊が帰ってくるお盆の時期に踊る「盆踊り」のなかでも、ひととき優雅とされる。編み笠や頭巾で顔を隠して死者に扮した踊り手たちの手振りや足運びは、しなやかで美しい。絹布を縫いあわせた「端縫い（はぬい）」の着物が踊りに花を添える（写真＝PIXTA）



白石踊 ◆岡山県笠岡市

12世紀に起きた合戦の戦死者を弔うために始まったとされる、白石島に伝わる盆踊り。「口説き」と呼ばれるひとつの音頭にあわせて何種類もの踊りが同時に舞われる。現在、伝わるのは13種類。衣装や所作の異なる踊りが生み出す調和に、思わず息をのむ（写真＝笠岡市役所）

毛馬内の盆踊 ◆秋田県鹿角市

篝火を囲みながら、ゆったりとした所作で指先までまっすぐ腕を伸ばしながら舞う情緒豊かな盆踊り。男女とも黒を基調とした正装の着物を身にまとい、水玉もよう柄の手ぬぐいで頬被りをする（写真＝アフロ）



やすらい花 ◆京都府京都市

桜が咲く春に、今宮、川上、玄武、上賀茂の4地区で行われる、災いをもたらす悪霊や疫病を鎮めることを願う行事。「赤熊（しゃぐま）」という赤や黒の髪をつけた鬼と呼ばれる役が鉦や太鼓を打ち鳴らし、「やすらい花や」の歌や笛の音とともに練り歩く。写真は今宮地区でのようす（写真＝アフロ）

滝宮の念仏踊 ◆香川県綾川町

平安時代に大干ばつから人びとを救った菅原道真公への感謝と五穀豊穡を祈って、毎年8月下旬、滝宮神社と滝宮天満宮へ奉納される。団扇を持った「下知（げんじ）」が「ナムアミドーヤ」の音頭と太鼓・笛・鉦・ぼら貝の囃子にあわせて踊る（写真＝綾川町）



綾子舞 ◆新潟県柏崎市

約500年前から伝わる芸能で、高原田（たかんだ）と下野（しも）のふたつの座元が伝承している。女性が踊る小歌踊、男性による囃子舞と狂言の三つで構成される。小歌踊はユライと呼ばれる赤い布を頭にかぶり、しなやかな扇の手振りや優雅な足さばきが魅力の踊りである（写真＝高橋正仁／芳賀ライブラリー）





吉弘楽 ◆大分県国東市

毎年7月に虫送り（農作物の虫除け）などを祈願し、楽庭（がくにわ）八幡社で行われる踊り。腰蓑をつけ、兜などをかぶった楽人たちが勇壮に舞う（写真＝国東市）

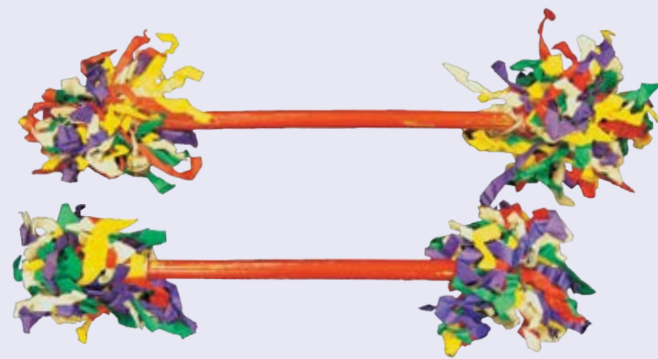


寒水の掛踊 ◆岐阜県郡上市

寒水地区にある白山神社で300年以上続く例祭に奉納される。シナイと呼ばれる竹製の花飾りを背負い、太鼓や鉦を打ちながら踊りまわる。面をつけたり、花笠をかぶったりと、踊り手のいでたちもさまざま（写真＝郡上市観光連盟）

チャッキラコ ◆神奈川県三浦市

豊漁や商売繁盛を祈願し、正月15日に海南神社で行われる舞。大人の女性の歌にあわせ、赤い着物をまとった少女たちが「チャッキラコ」という2本の綾竹（鈴と飾りをつけた竹の棒）や扇を持って舞う（写真＝アフロ）



綾竹

色紙や鈴などで装飾された竹の棒を、両手に持って回したり、打ち鳴らしたりしながら踊る。写真はチャッキラコで踊り手が持つ綾竹（写真＝三浦市）



太鼓

中空の胴に張られた膜をばちでたたいて音を出す打楽器。やすらい花や吉弘楽では、小さく高い音が出る締め太鼓（写真）を担いで叩きながら踊る



笛

風流踊でよく登場する竹製の横笛・篠笛。透き通った高音で、囃子の主旋律を奏でる

踊りを彩る小道具

リズムとメロディーを奏でる楽器や、振付にアクセントを加える小道具たちが、風流踊を華やかに盛り上げる。

協力●宮本卯之助商店



団扇

扇と同様、風を送る道具であるとともに、踊りで大切な役割を果たす。ひらひらとはためかしたり、拍子を打ったりして踊りに華やきを添える。写真は滝宮の念仏踊で用いる大団扇（写真＝綾川町）



扇

あおいで涼をとる実用だけでなく、扇は踊りや祭事に欠かすことのできない小道具。開いてかざしたり、波打つように動かしたり、使い方はさまざま。写真はチャッキラコで使う扇（写真＝三浦市）

鉦

銅などの金属でできた円盤状の打楽器で、ばちと呼ばれる細い棒で打ち、リズムを刻む。ほとんどの風流踊で用いられ、高く鋭い音を鳴らす



でんとう けいしょう ひと かくしん ひと 伝統を継承する人、革新する人

写真●栗原 論



三郎太さんが面を付け、『翁』を堂々と舞った

いの きのもちとともに舞う

「能」は、笛や小鼓、大鼓、太鼓による囃子と、言葉に節をつけた謡にあわせ、演者がすり足で舞台を踏みしめるようにゆったりと舞う現存する世界最古の歌舞劇。14世紀に生まれ、今に至るまで技や様式が受け継がれてきた。

その伝統を継承し、今後の活躍が最も期待される若き能楽師が、観世三郎太さんだ。能の創始者である観阿弥・世阿弥を流祖とする26世観世宗家の観世清和さんを父に持つ。

「先生（父）との稽古は毎日。動きの一つひとつを見て学びながら、繰り返しまねる日々が続いています」

5歳で初舞台、10歳で初のシテ（主役）、16歳で初めて面を付けて舞う「初面」を勤めるなど、父の清和さんの指導のもと成長を続け、23歳となった2022年には、観世家の芸として古くから伝わる『翁』という演目でシテを勤めた。

「数ある能の演目のなかでも特別」という『翁』は、ストーリーもなく、人びとの祈りを神に捧げる儀式のような演目。演者が神となり、未来の平和と亡者の供養を願って厳かに舞うのである。「祈りの気持ちが自然と湧き出なければ、よい舞にはなりません。そのためには、生活の立ち居振る舞いを正すことも、大切だと教えられました」

古典の継承に励むいっぽう、三郎太さんは近年、現代を題材

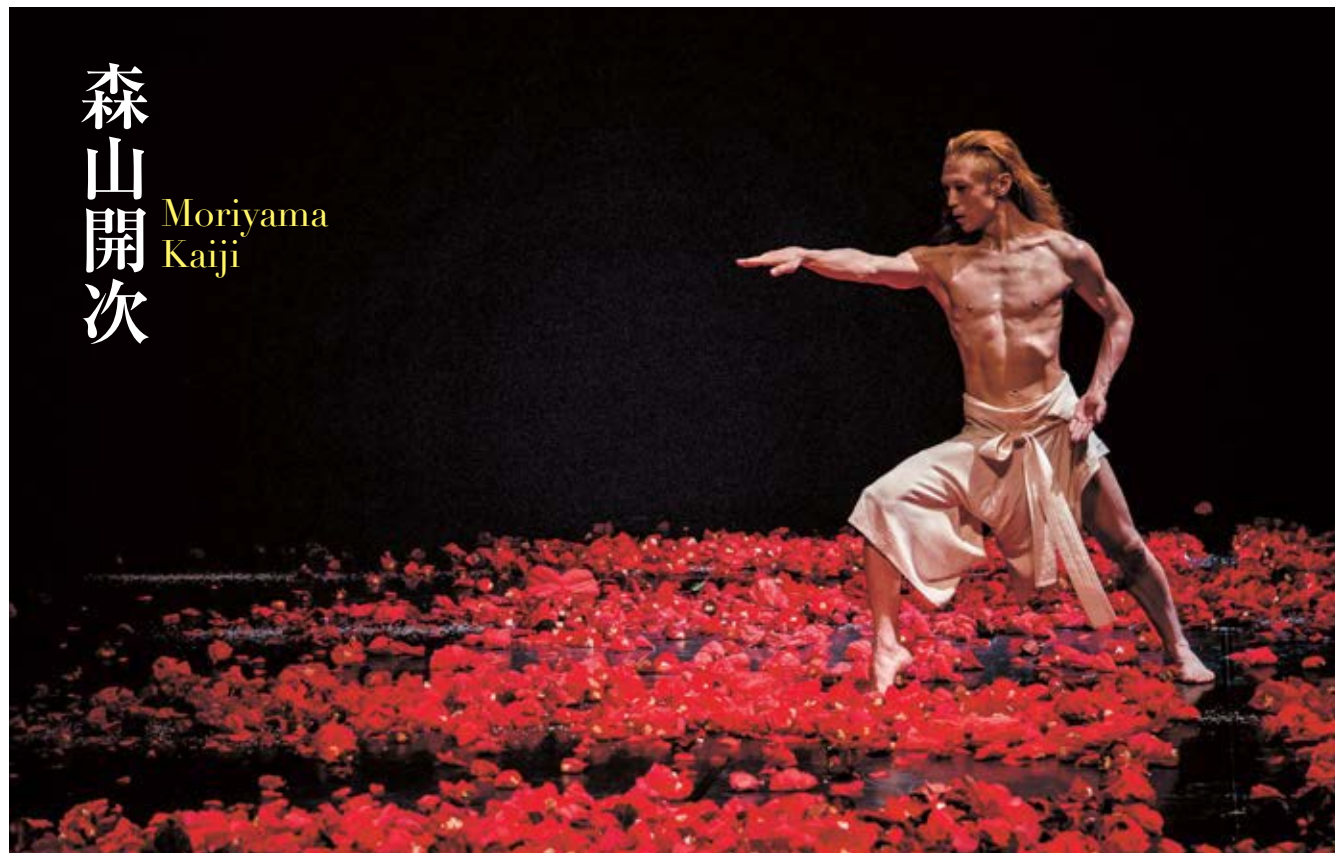


腰に力を入れあごを引く、能の基本所作「カマエ」の姿勢を取る三郎太さん

にした新作能にも挑戦している。古典芸能になじみが薄い人にも能の面白さを知ってもらきかけをつくりたいのだと語る。「わずかな言葉と所作だけで展開する能は、わかりにくいと感じる人も多いかもしれません。でも、想像をしながら自分なりに解釈して楽しむのも能の醍醐味です」

600年の歴史を受け継ぐ若手能楽師に、古典をテーマに新たな表現を拓く舞踊家。時代を超え、新旧の日本文化が舞と踊りに花開く。

森山開次 Moriyama Kaiji



存在と不在の間を踊りたい

森山開次さんはコンテンポラリーダンスの領域で活躍を続ける第一人者。しなやかで曲線的な動きと、空間を切り裂くような直線的な動きが同居する唯一無二の表現は、世界中で多くの観客を魅了している。

「私はよく、ふわっと浮くような動きをします。これは軽さを表すため。重さをなくし、可能なら自分の存在すら消してしまいたい。昔からこの感覚を求めて、ダンスを続けてきました」

その感覚を突き詰め、実現したのが、2001年に発表した『YU-ZURU 夕鶴』。鶴が人間に変身し老夫婦に恩返しをする民話『鶴の恩返し』をベースにしたという。鳥なのか人なのか、あるいはこの世のものですらないのか。実体があいまいなモチーフの物語を踊ることで、森山さんは不在を描き出そうとした。以来、「『存在と不在の間』を表現するのが、私のテーマになりました」。

その後は、研ぎ澄まされた日本刀を表現する『KATANA』や、忍者の妖術をユーモラスな踊りに取り入れた『NINJA』など、広く日本文化に題材を求めた舞台を展開している。

「刀に込められた精神や、気配を消して忍ぶ忍者の動きといった、目に見えにくいものを描き出しながら、日本人独特の身体表現を開拓していきたい」



上／鍛えぬいた肉体で日本刀の鋭さを表現する『KATANA』
Photo:Yoshikazu Inoue
中／ユーモラスな動きで忍者のイメージを描く「新国立劇場ダンス 森山開次『NINJA』」
撮影＝鹿摩隆司 提供＝新国立劇場
下／「どのような存在にもなれる身体を持続きたい」と語る森山さん
撮影協力＝スタジオアーキタンツ



お座敷の舞が味わえる贅沢 みやこ 都をどり

数ある日本舞踊の流派のなかで、京都で座敷舞として大成した京舞井上流。その振付による芸妓・舞妓の舞踊公演「都をどり」が、毎年4月1日～30日の期間、祇園甲部歌舞練場で披露される。普段はお座敷でしか観られない舞に接することのできる貴重な公演とあって、春の京都観光の目玉になっている。

左／フィナーレの総踊りのようす。約1時間の公演で、8つの演目が上演される
右／1913年に建設された歴史ある祇園甲部歌舞練場(写真＝カリテリンク)



踊りを観に劇場へ行こう

日本舞踊やモダンダンスにキャラクターの踊りまで。
バラエティあふれる踊りの公演を観に、劇場に出かけよう。



上／太鼓芸能集団鼓童の演奏にあわせ躍動的に踊る『鬼』(写真＝篠山紀信)
右／水に浮かぶように立つ新潟市民芸術文化会館



新潟から世界へ発信する新しい舞踊

Noism Company Niigata

Noism Company Niigataは、新潟市民芸術文化会館(りゅうとびあ)を拠点に活動する、日本初の公共劇場専属舞踊団。率いるのは世界的な演出振付家・舞踊家の金森穰で、東洋と西洋の身体技法を融合させたトレーニングによる唯一無二の舞踊表現を追求し、発信している。国内外から選ばれた舞踊家たちは新潟に拠点を置き、市民への地域活動にも携わりながら、世界へ発信する舞台芸術を創造している。



キャラクターといっしょに踊ろう

サンリオピューロランド

「ハローキティ」をはじめとするサンリオのキャラクターたちが歌い踊るようすを間近に見たいという夢は、屋内型テーマパーク・サンリオピューロランドに行けば叶えられる。ポップな曲とともに進むパレードに参加して、キャラクターといっしょにペンライトを大きく振ってダンスをすれば、さらに一体感を味わうことができるだろう。



上／サンリオの主要キャラクターたちのダンスを存分に楽しめる「Miracle Gift Parade」
左／物語の世界へ誘うサンリオピューロランドの入り口
©1990, 2023 SANRIO CO., LTD. TOKYO 著作権 株式会社サンリオ



【お推しの子】

天才的なアイドル・アイ（写真）とその子どもたちの物語を中心に、芸能界やアイドルのリアルを描く。作品中、アイをはじめとしたアイドルが歌い踊る姿がたびたび登場し、それをまねて踊った動画を、SNSに投稿する若者が続出している

© 赤坂アカ×横槍メンゴ／集英社・【推しの子】製作委員会

それいけ！ アンパンマン

1988年の放映開始から、長年にわたり子どもたちに愛される番組。正義のヒーロー、アンパンマンや仲間たちのエピソードを通して勇気や友情の大切さを描く。エンディング曲「アンパンマンたいそう」や「サンサンたいそう」などは、大きく体を動かす、子どもたちが覚えやすい振付のダンスになっていて、幼児のお遊戯会などでも演じられる

© やなせたかし／フレーベル館・TMS・NTV



© 高松美咲・講談社／「スキップとローファー」製作委員会

すずみや 涼宮ハルヒの憂鬱

高校生の涼宮ハルヒとキョンが織りなす、少し不思議な学園生活を描く。エンディング曲の「ハレ晴レユカイ」にあわせてキャラクターたちが見せるテンポのよいダンスを見て、実際に踊ってみる人が続出。さらにインターネットに投稿するという「踊ってみた」動画流行の火付け役になった

©2006 谷川流・いとうのいぢ／SOS 団



ひろがるスカイ！プリキュア

主人公たちが伝説の戦士「プリキュア」に変身し、さまざまな困難に立ち向かうシリーズ作品のひとつ。主要キャラクターが勢ぞろいするエンディングでは、子どもたちがつられて体を動かしたくなるかわいらしい振付のダンスが披露される

©ABC-A・東映アニメーション



スキップとローファー

地方から東京に出てきた主人公・岩倉美津未とその友人たちの交流を中心に、高校生の学園生活を描いた作品。オープニングで美津未と同級生の志摩聡介がスキップをしながら踊る場面は、見る人をあたかも気持ちにさせるやさしい雰囲気にあふれている

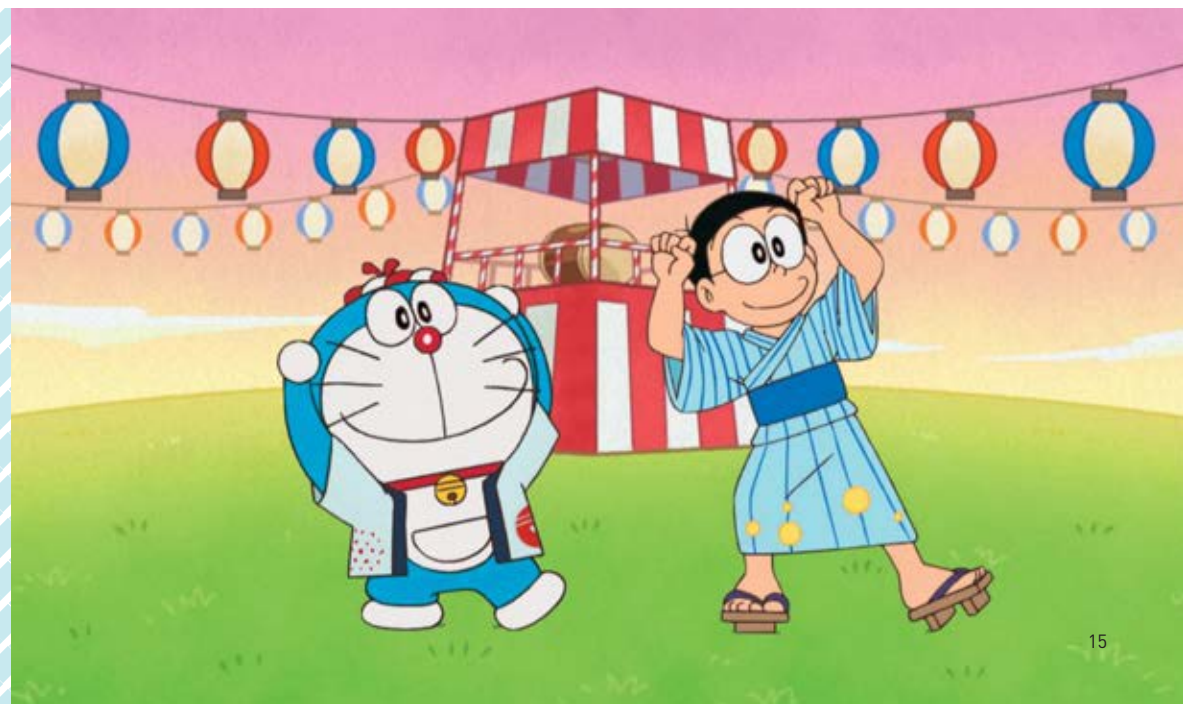
© 高松美咲・講談社／「スキップとローファー」製作委員会



ドラえもん

未来からやってきたネコ型ロボット・ドラえもん小学生・のび太の日常を描いた日本を代表する作品で、1979年から40年以上テレビ放映が続く長寿番組。エンディング曲のひとつ「のびのびドラえもん音頭」では、法被（はっぴ）や浴衣姿のキャラクターが盆踊りに興じる

© 藤子プロ・小学館・テレビ朝日・シンエイ・ADK





にっぽん 地図めぐり

仮面の踊り

はな どうぶつ おに かみさま
花や動物、鬼や神様……。まつ
祭りのひととき、にほんじん
日本人はさまざまなものに姿を変えて踊る。

しまね
島根

鷺舞

清らかな白い羽を持つサギは、古来おめでたい鳥とされてきた。島根県津和野町の弥栄（やさか）神社では、サギをかたどった頭と木製の羽をつけ雌雄2羽に扮した舞い手が、笛や太鼓にあわせて羽を広げたりすくめたりする動きを繰り返して舞う（写真＝photolibrary）



ひろしま
広島

花笠踊り

造花などで美しく飾りたてた「花笠」を使う郷土芸能は多数あるが、広島県北広島町の祭礼で使う花笠は、約1.5mの竹ひごに和紙の花を長く垂らした、とりわけ華やかなもの。笠をかぶり踊り歩く姿は優雅そのもの（写真＝photolibrary）



にいがた
新潟

鬼太鼓

芸能が盛んな新潟県佐渡島に伝わる鬼の舞。神社や人家で舞を捧げ、五穀豊穡や家内安全を祈る。太鼓が刻むリズムと能の要素を取り入れた柔らかな舞はエンターテインメント性に富み、約120カ所の集落で異なる特徴を探すのも楽しい（写真＝アマナイメーجز）



やまがた
山形

加勢鳥

ワラで編んだ「ケンダイ」と呼ばれる装束をまとい、神の使いである加勢鳥となった若者たちが「カッカッカー」と声を上げ踊りながら市中を練り歩く。街の人は火の用心や商売繁盛を祈り、手桶から勢いよく冷水を浴びせかける（写真＝山形県上山市）



みえ
三重

伊勢大神楽

獅子舞を専門とする「伊勢大神楽講社」の各団体が、全国を巡業したのち、年末、本拠地の増田神社（三重県桑名市）に勢ぞろいして競演する。獅子頭をつけて肩に乗り傘を回すといったアクロバティックな演目もあり、観る者を圧倒する（写真＝桑名市観光協会）



いわて
岩手

鹿踊り

様式は地域により異なるが、鹿をかたどった頭をかぶり、白紙で飾った竹の棒「ササラ」を頭上に高く掲げ、太鼓を叩き踊るのが代表的。ササラが地面につくほど頭を振り、ステップを踏んで激しく踊る姿は迫力がある（写真＝photolibrary）



さいたま
埼玉

川越まつりばやし

蔵造りの街並みが残る埼玉県川越市で秋に行われる祭り。街を練り歩く屋台「山車」の上で、キツネ（写真）や獅子などの仮面を付けた踊り手が、笛や太鼓の囃子にあわせて舞う（写真＝photolibrary）

きょうと
京都

仏舞

仏面と装束を身につけ、仏に扮した舞人が、雅楽の調べにあわせ優雅な所作で舞い踊る。毎年5月8日に京都府舞鶴市の松尾寺で行われる



くまもと
熊本

山鹿灯籠踊り

木や釘を使わず、手漉き和紙と糊だけでつくる飾り物「山鹿灯籠」は、熊本県山鹿市の伝統工芸品。毎夏、約千人の女性らが金色に輝く山鹿灯籠を頭に掲げ、民謡「よへば節」にあわせて踊る様は圧巻（写真＝PIXTA）

そうめん

なつ しょうたく いろど
夏の食卓を彩る
すず めん
涼やかな麺

写真●新居明子
協力●池利(千寿亭)



上／奈良県桜井市にある大神神社。そうめんの起源が伝わる(写真＝大神神社) 下／毛糸をそうめんに見立て、麺を細く延ばすようすを踊る「三輪素麺掛唄」のひとつ。地元の女性らが大神神社の境内で奉納する 左／乾麺の束で売られるそうめん。野菜の色素で緑や黄色に色づけたものもある

そうめんは、小麦粉と水と塩でできた、糸のように細い麺。その直径は1.3mm未満であることが規格で定められている。乾麺の状態ですでに売られているものを、食べる直前にゆでて流水でよくすすぎ、ダシをきかせた冷たいつけ汁に浸しながら食べる。見た目が涼やかで喉越しがよいだけでなく、食べごたえもあり、暑さで食欲が落ちる夏にはもってこいの麺料理である。

この細くて弾力のある麺は、無造作に引っばってできるものではなく、まさに絹糸を紡ぐような、繊細で複雑な工程を経る必要がある。はじめに小麦粉と水、塩をこねてまとめた生地を、帯状にしてから表面に油を塗り、ひとつにねじりあわせながら延ばしていく。延ばしたあとは寝か

せて熟成。これを繰り返して、やがて2本の棒に巻きつけてさらに細く引き延ばす。2mほどまでに延ばしたら吊るすように干し、乾燥させた後に長さ19cmに切断して出来上がり。

細くて見た目に涼やか、というそうめんの特徴を活かした「流しそうめん」は、野外イベントなどでよく行われる夏の風物詩。竹を半分に割ってつくった樋に水とそうめんを流し、流れてくるそうめんを競いあって食べるのが面白く、子どもたちにも人気がある。

寒い季節には、あたたかくした「煮麺」もおいしい。あらかじめゆでたそうめんをダシつゆをはって煮立て、シイタケや青菜、卵などの具材をのせて食べる。

そうめんの由来は諸説あるが、

「三輪そうめん」という名物の産地として知られる奈良県桜井市の三輪地区には、約1200年前、三輪にある大神神社の宮司の次男が飢饉で苦しむ人びとに小麦を作らせ、その小麦粉からそうめんづくりが始まったという伝説がある。

今も大神神社では、毎年2月にその年のそうめんの卸値を占う神事に続いて、地元の女性らによる踊り「三輪素麺掛唄」が奉納される。歌にも振付にも、そうめんづくりの苦楽がしのばれるが、踊りはほのぼのと明るく、観客を幸せな気持ちにさせてくれる。歴史と寄り添いながらつながってきたそうめんと踊りは、これからも長く受け継がれていくだろう。



上／冷たくて喉越しがよいそうめんは、夏に人気の麺料理。ダシと醤油、みりんで作るつけ汁に浸しながら食べる
右下／あたたかいダシ汁をはった「煮麺 (にゅうめん)」は寒い季節の食べ方
左下／流れるそうめんを箸ですくって食べる「流しそうめん」(写真＝ PIXTA)



清流と踊りの街

郡上八幡

なが
流れるせせらぎが
みみ
に心地よい
しず
かな街が、
なつ
夏には夜毎に続く「郡上おどり」の熱狂に包まれる。
にほん
日本を代表する踊りの聖地を堪能したい。

写真●栗原 論、PIXTA、photolibrary



- 1／街の中心部を流れる吉田川
- 2／郡上八幡へ向け走る長良川鉄道
- 3／木造再建城としては日本最古の郡上八幡城
- 4／郡上おどり（郡上踊）は「風流踊」としてユネスコの無形文化遺産に登録されている（©福田弘二）
- 5／郡上おどりに欠かせない下駄（左・写真提供＝郡上木履）と、手ぬぐい（写真提供＝郡上市商工観光部観光課）
- 6／10種類ある郡上おどりの演目から「かわさき」を実演する郡上八幡館の踊り子スタッフ





7

7／徹夜おどりの期間は、路上に人が連なり踊りに興じる（©郡上市観光連盟）



12



13



14



15



16



17



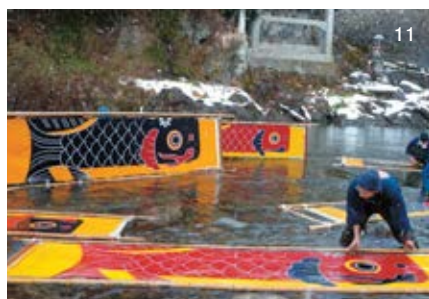
8



9



10



11

8／民家の裏を流れるいがわ小径に、鯉や川魚が泳ぐ
9／上段を飲料水に、下段を洗い物に使う水舟（©郡上市観光連盟）
10／渡辺染物店では、藍に染めた生地を水路でさらす、昔ながらの郡上本染の技法が受け継がれている
11／冬に小駄良川で行われる鯉のぼりの寒ざらし（写真提供＝渡辺染物店）

中部地方最大の都市、愛知県名古屋市から電車を乗り継いで2時間程度北上すると、岐阜県の郡上八幡に辿り着く。郡上八幡は、かつては霊峰白山への参詣者が足を休める逗留地として、「郡上八幡城」が築かれた16世紀後半以降は、多くの商人が行き交う城下町として発展してきた。周囲を山に囲まれ、市中を流れる吉田川と小駄良川の水音が心地よく響き渡り、今も昔も訪れる人の心を癒してくれる。

夏、この静かな街は「郡上おどり」で一変する。400年前から続く郡上おどりは、7月～9月にかけての31日間に市内各所を巡回して開催される盆踊り行事で、市民から観光客まで、街中が一体になって踊り続ける。圧巻は8月13日～16日にかけて開かれる徹夜おどり。夜8時から早朝5時まで踊り明かすこの時期は、市外からも数万に及ぶ人が訪れて、街は熱気に包まれる。

「郡上八幡博覧館」では、1年を通してインストラクターによる実演があり、開催期でなくても踊りの体験が可能だ。手を叩き、時に下駄で地面を打ち鳴らしながら、囃子にあわせて歌い踊るようすを見れば、つられて体が動いてしまうことだろう。

市内を散策すれば、「いがわ小径」をはじめとした水

12／香魚とも呼ばれる鮎は、塩焼きにして香りを楽しむ（©郡上市観光連盟） 13／郡上八幡の天然水を使ったサイダーはさわやかな味わい
14,15／古民家を改装したお抹茶処宗祇庵で提供されるパフェ。抹茶アートで郡上おどりが描かれている
16／工房で体験できる食品サンプルづくり（協力＝さんぶる工房） 17／フォークでパスタを絡めとるようすを表現した食品サンプル

路が街中に張り巡らされているのがわかる。17世紀の大火を契機に防火用として整備された水路は、今もこの街の暮らしには欠かすことができない。山水や湧水を引き込んだ貯水槽の「水舟」や、野菜のすすぎ洗いなどに使う洗い場が各水路の傍らに設けられている。伝統工芸の「郡上本染」にとっても水路は必要不可欠。藍の染料は流水にさらすことでより鮮やかに発色し、生地も引き締まる。冬になると川中で、男児の成長を祝って飾られる鯉のぼりを清流にさらす「鯉のぼりの寒ざ

らし」も行われる。雪の降るなか、鮮やかな色彩が川面に浮かび上がる光景は、郡上八幡ならではの冬景色だ。水辺のせせらぎを感じながら屋台で売られる名物の鮎の塩焼きを食べたり、古民家を改装した甘味処で一息ついたりするのも楽しいひととき。また、工房ののれんをくぐり、郡上八幡が発祥の食品サンプルづくりを体験するのも、特別な思い出のひとつになるだろう。踊りの賑わいとせせらぎ散歩。動と静の異なる郡上八幡の魅力を心ゆくまで堪能してほしい。



郡上八幡エリア地図

- ①郡上八幡城
- ②郡上八幡博覧館
- ③いがわ小径
- ④渡辺染物店
- ⑤お抹茶処宗祇庵
- ⑥さんぶる工房

●交通案内
名古屋駅から郡上八幡駅まで、J Rの特急と長良川鉄道乗り継いで約2時間。

●問い合わせ
郡上市観光連盟公式サイト「TABITABI郡上」
<https://tabitabigujo.com/>



よそお はな そ
装いに華やぎを添える

かんざし



真珠をあしらった金属工芸の草花（1・3）、絹でつくられた花々で彩られたもの（2）、ヘアピンのように気軽に挿したいポップな紫陽花（4）、漆と金で鳥を描いた格調高い一品（5）、絹で一輪の桜をかたどったもの（6）など、素材もデザインもさまざまなかんざし。
7 / かんざしに下がる飾りが歩くたびにゆれ、装う人の心をときめかせる

7

かんざしは、日本の伝統的な女性用髪飾りのひとつ。現代でも、日本舞踊や盆踊りといった機会での装をする際は、髪が衿にかからないようアップやお団子の髪型にし、最後にかんざしを挿すことが多い。

髪に挿す装身具は、すでに8世紀頃に存在したといわれるが、その後、女性の髪型は下げ髪が主流となり、かんざし不要の時代が長く続いた。一般に広く流行したのは、江戸時代（1603～1868）になってから。髪を束ねる結び髪が女性の間で流行し、そ

こに挿す飾りとしてかんざしが欠かせないものになった。金属や石、木、布、紙などを使い、手の込んだ細工で花や鳥をかたどった多彩なデザインのかんざしが次々と生まれた。

現代ではプラスチックやガラスでできた安価な製品もあり、特別な日だけでなく、普段使いの髪飾りとして、気軽にかんざしを挿してみるのもいいだろう。

写真提供＝かつら清

